予告 Future Event

“展覧会をつくろう！”
—洋画コース3・4年生授業内企画展—

2008年7月11日［金］—16日［水］
12:00➔18:00（最終日は17:00まで）
日曜休館　入場無料
会場：名古屋芸術大学アート＆デザインセンター

授業の一環として、ゲストキュレーターに市原研太郎氏（美術評論家）を迎え、3・4年生の選抜展を開催します。

素材展
メタル＆ジュエリーデザインコース
テキスタイルデザインコース

2008年7月18日［金］—23日［水］
12:00➔18:00（最終日は17:00まで）
日曜休館　入場無料
会場：名古屋芸術大学アート＆デザインセンター

デザイン学部クラフトブロック、
メタル&ジュエリーデザインコース・テキスタイルデザインコースの
作品展を開催します。

開催しました

デザインと文化

本学デザイン学部では、デザインなどの現場でユニークな活動をしておられる方々を特別講師としてお招きし、一般の方々にもご参加いただける公開講座を開催しています。

今年度はすでに、「デザインと文化　1」において、4月26日の宮脇伸歩（INAXデザイナー）による「サスティナブル・デザイン」を皮切りに、5月10日の真田岳彦（アーティスト）「現代における心の問題」、5月24日光島和子（ガラス作家）「自作を語る　ガラスによるジュエリーとオブジェ」、6月7日は喜田夏記（映像作家）、6月21日中谷礼仁（歴史工学研究家）の公開講座を開催いたしました（敬称略）。

アート&デザインセンター
6 EXHIBITION → 9 SCHEDULE
展覧会スケジュール

Open 12:00—18:00
（最終日は17:00まで）
7/24—9/10夏期休館

［入場無料］どなたでもご覧いただけます。
スケジュールは変更になる場合がありますので、ご確認ください。

6/13金➔ 6/18水	others vol.2　悲しいカレー展
6/13金➔ 6/18水	書道演習作品展
6/20金➔ 6/25水	大学院美術研究科同時代表現研究一年生作品展
6/27金➔ 7/ 2水	へその緒地帯
6/27金➔ 7/ 2水	beginning 名芸映像研究部＋豊根中学校選択美術学生
7/ 4金➔ 7/ 9水	前期交換留学生展
7/11金➔ 7/16水	“展覧会をつくろう！” —洋画コース3・4年生授業内企画展—
7/18金➔ 7/23水	素材展　メタル＆ジュエリーデザインコース+テキスタイルデザインコース
7/24木➔ 9/10水	夏期休館
9/11木➔ 9/17水	ソフトスカルプチャーへ 2008展
9/19金➔ 9/30火	2008年度企画展　MONUMENT FOR NOTHING 2 会田誠と学生たちによるワークショップ

Art & Design Center
名古屋芸術大学アート&デザインセンター　〒481-8535 愛知県北名古屋市徳重西沼65番地 tel.0568-24-0325　tel/fax.0568-24-2897

編集後記

柳宗理氏の言葉「モノを生み出すデザイナーの責任」。またGKの「“本質とは何か？”と問いかけ続ける」。どちらも、現代社会に響いてきます。今回は国内のデザインコンペを取り上げましたが、世界的なファッションブランドのひとつでは、自社のイメージビデオクリップの音楽をコンペで募集しています。そしてその結果は、グランプリだけでなく上位入賞者の作品とともにホームページで公開されており、私たちは、同じイメージ映像がいかに音楽で変化するのか、その多様性も楽しむことができます。コンペに出品するということは、たとえテーマが与えられたものだとしても、社会との関わりを意識し、ひとつのことを多角的に考える貴重な経験となるに違いありません。

B!e　Vol.21
発行日　2008年7月7日
編　集　江坂恵里子（アート＆デザインセンター）
発　行　名古屋芸術大学アート＆デザインセンター
〒481-8535 愛知県北名古屋市徳重西沼65番地
Tel. 0568-24-0325　Fax. 0568-24-0326（代表）
Tel/Fax. 0568-24-2897（直通）
E-mail adc@nua.ac.jp
URL http://www.nua.ac.jp
デザイン　岩田知人（サンメッセ株式会社）
印　刷　サンメッセ株式会社
2008 Printed in Japan

© Art & Design Center, Nagoya University of Arts

最寄りの交通機関をご利用の場合
名鉄犬山線(地下鉄鶴舞線乗り入れ)
徳重・名古屋芸大駅下車西へ約1,000m徒歩15分
※急行・準急電車の場合は西春駅で普通電車に乗り換えるか下車してください
中部国際空港からも名鉄犬山線をご利用ください
西春駅から北西約2,200m徒歩25分、西春駅からはタクシーの便もあります

自動車をご利用の場合
名神一宮インターから10分、名神小牧インターから15分。

大学基準協会認定マーク
本学は2006年4月に認証評価機関である大学基準協会の大学基準に適合と認定され、正会員になりました。
認定期間は2006年4月から2011年3月までです。
これによって法令化されている「第三者による認証評価」にも合格したことになります。

NAGOYA UNIVERSITY OF ARTS
名古屋芸術大学

B!e

2008 Vol. 21
ART & DESIGN CENTER NEWS

柳　宗理
レコードプレーヤー
毎日新聞社主催第一回新日本工業デザインコンクール（現・毎日デザイン賞）
第一席作品
日本コロムビア製作　1952年

GKデザイン 逆井宏
電話ボックスデザインコンペティション
第一席作品
公衆電話ボックス（愛称「丹頂鶴」）
日本電信電話公社　1953年

特集 Design Competition

21世紀のデザインコンペ

これからのデザインコンペ（デザイン設計競技）を語る上で、
まず日本のデザインコンペの変遷を語らずしては先に進めない。

柳宗理のコンペ第一席獲得

日本で最初のインダストリアルデザインコンペは、1952年に開催された第一回新日本工業デザインコンクール（のちの毎日工業デザインコンペティション）である。その時の特選一席を獲得したのが、柳宗理であった。当時賞金が100万円と高額だったことも話題となった。アメリカ人デザイナーのレイモンド・ローウィがピース（タバコのパッケージ）のデザインを手がけ、デザイン料の150万円が破格の値段だと言われた頃の出来事だ。

この賞金をどう使ったか?と興味を持っていたら、日本の近代デザイン運動史に本人の言葉として、「棚からぼた餅が落ちてきたようなもの、そのうちの30万円を創立したばかりの日本インダストリアルデザイナー協会に寄付をし、残りを財団法人柳工業デザイン研究会設立基金にした。」と書かれていた。すなわち賞金を私有することなく、当時のインダストリアルデザイン界に寄付したいと思ったのである。私はこれを読んだ時、さすがに並大抵ではできない行動だと感動した。

1953年、今から半世紀以上も前に、すでに柳宗理は「浪費によって捨てるゴミは、今日急激に増えつつある、人間が造ったものは終局的には土に戻してやらねばならぬ。」と物を生み出すデザイナーの社会的責任を問い正し、社会問題を解決できなければ良いデザインは生まれてこないと言いきっていた。

注目すべき、ひとつのデザイン活動「GK誕生」

インダストリアルデザインの使命をまっとうすべく、東京芸大の学生グループは故小池岩太郎助教授（当時）の名を冠し、Group of Koike = GKとして1953年に活動を始め、常に課題は「本質とは何か」を問いつめるデザイン創造の姿勢で、次々とデザインコンペを勝ち抜いていった。

1953年、電話ボックスデザインコンペで　GKメンバーの逆井宏氏が第一席を受賞した作品が、当時もちろん携帯電話などなかった時代に、どこにでも目にした、あの公衆電話ボックスである。

さらに1955年第4回毎日工業デザインコンペ特選一席（汎用モーター）を獲得。新たな時代を敏感に感じ取り、ものづくりを通じて力強い未来を切り開いていく事を、使命として努力を重ねた結果である。その努力の根源には「広く心を開く」「多くの知恵を集める」「深く思いを巡らす」激しい思いの交感、熱い心情の共有があってこそで、今の情報過多な時代ではなかなかピュアーになるのは難しい。この時代は情報に左右されることなく、純粋にデザインを追求できるシンプルな環境があったからだと感じている。

私とデザインコンペ

振り返ると数える事ができないほどの、デザインコンペ作品作りに没頭した時代があった。大学卒業後、デザイン事務所に勤務したころからで、新人には登龍門だった「毎日工業デザインコンペ」。これを獲得すればデザイナーとしての道が開けると、誰しも思っていた時代であった。

デザイン事務所の先輩や同僚と3人、仕事の後や、休みの日に集まって議論を戦わせ、作品づくりをしていた。みな夢に向かって夢中だった。

結論から言うと、上位に入賞することがかなわぬまま、次は頑張るぞと、数回チャレンジした頃に32回でこのコンペは終わってしまった。

名古屋国際デザインコンペ　「デザインDO!」の活動。

1989年に名古屋で開催された、国際デザイン博覧会終了後に、名古屋デザインコンペを国際デザインセンターや名古屋市、名古屋のデザイナーやデザイン教育機関の関係者で運営委員会を立ち上げ、企画の手伝いをする事になった。当時まだ30代だった筆者は、先輩たちの企画力や資料分析力、運営方法など、多様な能力を学ぶ事ができた。そして、このコンペが国際デザインコンペティションへ昇格する時には、今までの経験から、「ただコンペで賞金を授与するのではなく、受賞者には一週間ほど名古屋に滞在してもらい、名古屋をテーマにデザインワークショップを行う。そこに学生たちを参加させ、世界中にデザインを通じて人のネットワークを築きあげるという規定を必ず設けよう」と強く主張した。幸いなんとか合意を得、今もデザインワークショップは続いている。すでに300名ほどが海外で活躍し、この企画のおかげで、ヨーロッパやアジアの環境や人々の暮らしを学ぶ事ができ、ネットワークも広がった。

これからのデザインコンペ。

インターネットの登竜門でデザインコンペを検索すると、何と今行われているコンペは数えてみたら、デザインのジャンルで186件（デジタル11／インテリア11／写真65／グラフィック・イラスト41／ID・プロダクト10／クラフト15／建築11／ファッション9）あった。おのおの地場の活性化やメーカーは世界へ発信しようと躍起になっているが、それにしても日本のコンペは多すぎて、学生はデザインコンペにチャレンジしようとは思わなくなっているのでは?ここにも情報過多でやる気が起こらなくなっているように感じてならない。柳宗理やGKグループの、あの純粋な気持ちでデザイン活動をする若者はもうでてこないのかな?いやいやヤングパワーはそんなもんじゃないと期待しよう。

デザイン学部デザイン学科教授　和田義行

特集 Design Competition

21世紀のデザインコンペ

応募してみよう!

プロ・アマを問わないコンペティション

Tokyo Midtown Award 2008 デザインコンペ

テーマ「Japanese New Souvenir　日本の新しいおみやげ」

今回が第1回目。「アートコンペ」「デザインコンペ」の2部門を設けている。

http://www.tokyo-midtown.com/jp/index.html

シヤチハタ・ニュープロダクト・デザイン・コンペティション

1999年からスタートした、プロ・アマを問わず、商品化を前提に選考していくプロダクトのデザインコンペティション。

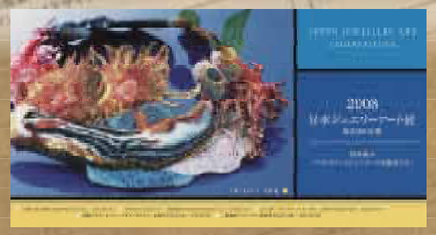
http://www.shachihata.co.j

MUJI AWARD 03

テーマ「Found MUJI — 発見される無印良品 —」

今年で3回目となる国際コンペ。世界中から応募がある。

http://www.muji.net/award/



本学の学生も「UNDER 26」に入選しました!

第25回公募2008日本ジュエリーアート展

国際デザインセンター・デザインギャラリー

2008年7月2日(水)〜7日(月)11:00〜20:00(最終日は18:00まで)◎会期中無休

(社)日本ジュウリーデザイナー協会が主催する公募展「ジュエリーアート展」。

ジュエリーに次代のメッセージを込めることを期待し、既成の枠にとらわれない新しいジュエリー作品を募集。

今回から26才以下を対象に「under26」部門を設け、幅広い層からの創造性豊かな次代のジュエリーの提案を受付けている。

デザインギャラリーでは入賞作品の他一部と招待展示「アメリカアートジュエリーの先駆者たち」の作品が展示されます。

本学からの「UNDER 26」入選者は、久我ミラグロス・桑山明美・松井いず美の3名。

http://www.idcn.jp/

RELAY ESSAY

薔薇を食す …… 荻原雄一

昔男ありけり。彼は大学院に籍を置いていた。が、当時の私が勤務していた横浜の女子校に、同じ国語科の専任教員として入って来た。この女子校は伝統を重んじる厳格な校風であった。しかし、彼は始業式に、髪を肩まで伸ばし、ノーネクタイにGパン、その上コンバースの真っ赤なシューズを穿いて参列して、同僚の度肝を抜いた。壇上での挨拶も風変わりだった。「お小遣い前の日曜日で、財布に百円しか残っていなかったら、みんなはどうする?」と話し始めた。「その百円で、カップヌードルを買うかい?それとも薔薇の花を買うかい?」この言葉を耳にして、教職員の誰もが「気障な奴だ」と口中で呟いたはずだ。この新任は「ぼくは薔薇を買う」と胸を張って得意げにのたまうだろうと。確かに彼は、そう答えた。しかし、彼はその後を捻った。「その薔薇をひねもす眺め暮す。そしてどうしても腹ペコになったら、花も葉も茎も、いや棘だってフライパンで炒めて、薔薇を食べ尽くすよ。こんなふうに生きていきたい」生徒たちからは大爆笑が起こり、彼はそのいでたちから「ベートーベン」という渾名を被せられて、たちまちチョー人気教師になった。

彼が受け持った高三の「現代文」の二時間続きの選択授業に、百五十人もの生徒が殺到してしまい、国語科で問題となった。主任の女性教員が自信たっぷりに増コマを引き受けた。「どちらの教員を選ぶかは、生徒に任せましょうね。○○先生、生徒が一桁に減少してもやってくれますよね」ところが、一桁の生徒数は、主任の方だった。すると、「ベートーベン」だけ教頭に呼ばれ、その授業の一学期分のシラバスを提出せよと命じられた。彼のシラバスは国語科で討議された。中でも、スタインベックの『二十日鼠と人間』が攻撃された。「現代文なのに、いかがなものか」私は彼を助けるべく「高三の教科書に、同じ作者の『朝めし』が載っていますよ」と援護しようとした。しかし、彼自身が先に口を開いた。「ご存知だと思いますが」ここでいったん切って、あとは一気に捲し立てた。「スタインベックはノーベル賞を取った作家ですよね。彼のヒューマニズムは日本の『白樺派』に多大な影響を与えました。二学期は『白樺派』を題材にしたいので、その布石と考えています」「それなら初めからそう言えよ」ベテランの教員が叫んだ。他の教員もただ頷いた。彼のシラバスは国語科をパスした。しかし、私は腹の中で大笑いしていた。「スタインベックが、『白樺派』に影響を与えただって?この大嘘つきのベートーベンが。これが『薔薇を食す』の正体なのか!」

デザイン学部教養部会

レビュー REVIEW レポート

アートアワードトーキョー2008

2008年4月4日 − 5月6日
丸の内行幸地下ギャラリー／東京

写真：木奥惠三©Art Award Tokyo

今年で2回目となるアートアワードトーキョー(以下AAT)は、国内の主要な美術大学・大学院の卒業制作展へ審査員が足を運び、その中から選抜した作品・作家を、丸の内地下にある御幸行幸地下通りギャラリーに展示し、それに続く公開審査によりグランプリ賞を与えるというものである。そして『新たな才能を世界に向けて発掘する。』という大きな目的を持っている。

ひょんなことから　本学洋画コースにもAAT事務局から依頼があり、優秀な学生を数名ノミネートしてもらったが、厳しい審査に通ったのは本学からは佐藤翠(2007年度美術学部洋画コース卒業)のみであった。

会場となった広い地下通路の両サイドは、等間隔にショーウィンドーが並列されており、その全てのケース内に選ばれた44名の作品が飾られていた。選抜に当たって高いハードルをもっているこの展覧会は、才能を要求されるだけに、本音をいうと一人でも良いから本学から選抜されると嬉しいといった思いだった。その中でなおも光り輝く彼女の絵画的センスと実力には正直驚かされた。

透明なガラス張りのショーケースの一つに、絵画作品「Closet」とクッションや鏡台やテキスタイル等にアクリル描写を施したインスタレーション作品の2点が並べて展示されていた。佐藤の絵画作品は気品あるロココ風フランス絵画を連想させる柔らかくてアマ〜い色彩とニューペインティング的な描写で完結されており、その大らかで力強い具象絵画のもつ説得力にまずは圧倒された。一方のインスタレーション作品もスケールが大きく、次世代作家として期待されるであろうことを予感させる。しかし、もともと虚飾的特徴を持っているショーウィンドーケース内でのインスタレーション作品の展示は分が悪く、商業ディスプレイ的なものに陥り易くもあり、難しかっただろう。

後ほど耳に入ったことだが、佐藤の作品は惜しくもグランプリは逃したものの、美術関係者等の評判をとったとのこと。これが事実であれば嬉しいニュースなのだが。

美術学部美術学科教授　大崎正裕

久野利博展

2008年4月29日 − 5月10日
ギャラリー16／京都

壁にブロンズの中華のお玉が取り付けられ、麻糸や布と並んでいる。布掛けには金属の小さなアミや裸電球が付いている。床のまな板の上には岩塩が置かれ、ガラス容器の中にも岩塩が入れてある。陶器から鋳物に置き換えられた骨壺の中には灰が詰っており、線香を燃やした後がある。もう一度壁に眼を転じると、別の形をしたガラスの容器が壁にあり、その並びの梯子にも、中華のお玉が付いている。

久野利博は、衣食住に関わる生活用具の形に着目し、それらを小道具として、空間に設置する。小道具と小道具の位置関係を仔細に検討し、それら部分の連続によって、空間全体を把握しようとしている。それは全体を一度に見せているのではない。部分と部分を繋ぎながら時間の流れに乗せて運ぶ表現は、懐石料理の時空の流れのようだ。

20年前久野氏がヨーロッパを回ったとき、西洋美術に対抗するには、西洋美術の構築的な空間フォルムではなく、日本固有の空間とものの捉え方を重視しなければならないと考えたという。ものが空間を力づくでねじ伏せるのではなく、余白とものの良いバランスを計り、空間を良く見せるためにものがあるという考え方。

もともとこのような表現に至ったのは、パリの古道具屋で古い金槌に出会ったのがきっかけと聞いた。使い込んだ道具の形の良さ。つくりたての形が、長い時間使われて道具の端がすりへり、無駄のない素直な形に変化していった。忙しい現代社会で見失われた形、生活に根ざした手仕事から生まれた無理のないものの形。そのような精神をいただきたいとのことであった。

デザイン学部デザイン学科准教授　扇千花

櫃田珠実展「The Garden」

2008年5月17日 − 6月7日
TKG Contemporary(TOMIO KOYAMA GALLERY)／東京

パノラマを思わせるような横長の画面の中には、庭園の風景が拡がり、その中から鹿や、泉、滝、白鳥、薔薇などのイメージが立ち現れる。櫃田珠実の個展「The Garden」における作品群は 作者自身の言葉にもあるように、装飾性があって神聖なものの数々が、壁面の中のかなり大きな矩形の中で戯れている。一つの疑問として、これらの神聖なものの数々が何処に向かって描かれているのかと考えた時、ゲーテの「親和力」という小説の中に登場するイギリス式庭園(風景庭園)のことを思い出した。ベンヤミンはこの小説において、庭園の風景、磁気、湖、風等のファクターが、登場人物の運命やストーリー展開に大きな影響を与えているという指摘をしている。このような庭園文化と文学言語のマッピングに関する着想の延長線上で、モチーフを自然から都市へと移行させたベンヤミンはやがて「パサージュ論」を書いた。櫃田作品の話に戻れば、これらの作品群がギャラリーをとび出して、再び都市の中の駅やホテルや銀行のロビー、或は個人邸の応接間等に展示された場合、そのインテリアの中に入れ子状にこれらの庭園イメージが現出することになる。(その時こそ、最も彼女の作品の威力が発揮され、室内にある種の擬似的なパサージュが展開するのだが、)ベンヤミンの「親和力論」から「パサージュ論」へと至る言説においては、庭園内の自然の中に見いだされた境界線、或いは都市の中の地誌的輪郭の境界線を侵犯することと、その境界線自体を崇拝することの神話的意味が語られている。櫃田の庭園イメージと作品が設営されるインテリアとの境界線は、物理的には厚さ数ミリメートルのアクリル板であるが、この(通常は意識されない)境界線(＝敷居)こそ、実は最も神聖な存在であり、鹿や、泉、滝、白鳥、薔薇は、まさにこの境界線に向けて放たれているのではないかと想像してみた。

デザイン学部デザイン学科准教授　津田佳紀

常滑アート＆デザイン工場2008／TOKONAME CRAFT & ART PARTY 常滑クラフトフェスタ 01

2008年4月27日 − 5月6日
art & design rin／旧常滑高校(愛知)

昨年私は、何人かの人々と連休期間中に、常滑のいくつかの元製陶工場を使い、常滑のまちを巡る展覧会「常滑アート＆デザイン工場　利助　三信　佐平治」を開き、これまで気がつかなかった常滑の風景、時間の流れ方の魅力を地元の人々や観光客に伝えた。今年は、百年以上の歴史ある常滑高校が今年３月で廃校になったことで、旧常滑高校をメイン会場とした、常滑クラフトフェスタ01が、５月３日から６日まで、市内さまざまな場所を使って開催され、本学も参加した。旧常滑高校から廃棄された道具や備品をre-designしたスペースデザインコースの作品展や、町のフィールドワークをもとに映像作品をつくったメディアデザインコースの作品展など、昨年に続き好評であった。また地元の作家、本学の教員、学生の作品による「常滑アート＆デザイン工場 08」展がギャラリーrinで、同じく教職員、学生、卒業生による陶芸作品展が常滑工房ギャラリーで開かれた。期間中大勢の地元の人々や観光客が訪れ、少しずつ変わりつつある常滑の町を楽しんでいるようであった。今年も、若いエネルギーが、地元の人々に新しいメッセージを投げかけたようだ。また、常滑で活躍している陶芸家の吉川正道氏が、昨年より本学で教鞭をとることとなり、今後も地元の人々との継続したつながりを持つことが期待される。

デザイン学部デザイン学科教授　平田哲生